

奏楽者の風箱

No.41 2025.10

発行：日本聖公会北海道教区礼拝委員会

静けさを奏でる礼拝

司祭 ヘレン 木村タ子

数年前、南アフリカのヨハネスブルグで行われた聖公会の礼拝に参加する機会がありました。もし皆さんがこの礼拝に立ち会ったら、きっと驚かれることでしょう。壮麗な大聖堂には立派なパイプオルガンが備えられ、専属と思しきオルガニストが奏でる後奏には、自然と拍手が湧き起こります。荘厳な雰囲気の中、礼拝奉仕者たちが香を焚きながら入堂し、聖餐式が始まりました。聖書朗読と説教は、私たちが慣れ親しんだ流れと変わらず、心に深く響くものでした。

ところが、献金の時になると、礼拝の空気が一変します。一人の声が呼びかけるように歌い始めると、まるで水面に波紋が広がるように、次々と人々が歌に加わり、会堂全体がリズムを刻み始めました。ステップを踏みながら腕で拍をとり、前かがみの姿勢でゆっくりと歩き回る人々。視線を交わし、笑顔を交わしながら、歌と踊りが神さまへの捧げものとなっていくのです。ドラムや鐘の音が加わると、心が自然と躍り出し、アカペラの歌はやがて美しいハーモニーに。舌を巻くような高音の装飾音があちこちで響き渡り、礼拝の場は希望と喜びに満ちていきました。

この瞬間、私は「今、本当にアフリカにいる」と実感していました。大地の広さ、自然の力強さ、人々の明るさと温かさ、生きていることへの感謝——それらが礼拝の中に息づいていたのです。伝統的で荘厳な聖公会の形式の中に、アフリカの教会は自らの魂を宿らせていました。

この歌と踊りは、私の心に深く残っています。とても新鮮な魅力を感じるもので、またぜひ参加したいと思わせる礼拝でした。音楽が、アフリカの文化の中で神さまへの賛美の独自のスタイルを形成していることを、改めて教えられた体験でした。

日本の私たちの魂は、アフリカの教会のように礼拝の中で表現されていないのでしょうか。そんな問いが、私の心に残りました。日本の教会は、宣教師たちがもたらした礼拝形式を大切に守ってきました。その中で、仏教や神道に通じる文化的要素は、礼拝の場から慎重な距離を保ってきた時代もあったように思います。アフリカのように礼拝の中で歌い踊ることは、私たちの気質には馴染まないと感じる方も多いでしょう。それでも、音楽を通して新たな表現を模索する取り組みを続けている教会もあります。

では、日本の教会が魂の表現をどこに宿しているのか。それは、静けさの中にあるのだと思います。沈黙の祈りを通して「共にあろうとする」感覚のように、他者や世界に対する祈りの心を宿しています。和のしづえが装飾を最小限にして、もてなしを表すのに似ています。季節の移ろいを味わう感覚で選定される聖歌の旋律、そして他者を思う深い祈りを含んだ沈黙の中に響く「アーメン」の声とその余韻——私たちの魂が礼拝の中で息づいている場所は、そこにあるのだと思います。

(2ページ下へつづく)

礼拝研修会開催される

6月20日(金)より21日(日)まで、札幌キリスト教会を会場に、北海道教区礼拝研修会がコロナ禍を挟んで、7年ぶりに開催されました。今回は初めてオンラインでの配信も試みました。「これからの祈祷書について学ぶ」というテーマのもと、管区祈祷書改正委員の市原信太郎司祭(中部教区)と委員長の笹森田鶴主教を講師におむかえして行われました。参加者は、59名(会場42名、オンライン17名)。

プレセッション 祈祷書資料展示・説明

セッション1 なぜ祈祷書改正？

祈祷書改正の理念

毎日の祈り

セッション2 祈りの言葉

詩編

セッション3 入信の式

教会問答

セッション4 ユーカリスト(聖餐式)

セッション5 牧会諸式

病者と共に捧げる礼拝

葬送の式

聖婚式

セッション6 ワークショップ 「御言葉の礼拝」をくみだててみる

主日礼拝 感謝聖餐式



配布資料

配布されたたくさんの資料を見ながら、想像を絶する改正作業のお話を伺いました。先人の皆さんの思いを受け継ぎつつ、今の社会に生きる私たちが、多彩ないのちを大切にする日本聖公会の祈祷書を作っていく過程を共有できたことに感謝。研修会中の礼拝(感謝聖餐式を除く)は、参加信徒によって司式、奏楽がなされました。オルガン、ピアノ、ヒムプレーヤー、アカペラと多彩にとんでおり、各教会に持ちかえるアイディアともなったようです。

.....

(1頁下より)

アフリカの教会が歌と踊りで神に近づくように、日本の教会は静けさと調和の中で神さまに心を向けています。休符もまた音楽を形成する重要な要素であるように、静けさは、希望と祈りを持って神さまの御前に立つ私たちの魂が形づくる礼拝の捧げものであり、とても日本の私たちらしいものと言えると思います。

世界の各地で捧げられる礼拝の中で、日本のさまざまな礼拝で捧げられる「アーメン」の響き。それらの一つひとつを尊い捧げものとして受け取ってくださる神さまに、希望と感謝を捧げ続けます。

礼拝研修会に参加された方からいただいた感想をご紹介します。

未来へのバトン

札幌キリスト教会 ヨハネ 福島康高

私が子どもの頃は、その後「文語祈祷書」とも呼ばれる1959年版の祈祷書が使われていました。まだ若かったこともあり、縦書きで難解な言葉や言い回しが多かった印象で、1990年版の現行祈祷書を高校3年で手にした当時は、読みやすく親しみやすいもの変わったように感じたものでした。

今回の研修会で特に印象深かったのは、改正祈祷書の方向性・指針として、私たちの「ライフ(いのち/生活/人生)」に関わっている共同体としての教会が、これまで大切にしてきた礼拝や伝統を尊重しつつ、21世紀を生きる私たちが信仰の旅路を歩んでいく上で、さらに「多彩ないのちを大切にする」ための祈りの書となるよう、対話を重ねながら入念に作業を進めているという点です。現在の社会や聖公会の現状を踏まえ、将来像を見据えた形で新たな視点を取り入れ、様々な目的や状況に応じた礼拝の組み立てができるよう、選択肢の数や選択の自由度が増えている点も見受けられました。

最終日の主日には、試用版式文を用いた感謝聖餐式が献げられ、感謝聖別祈祷では、東アジアの聖公会の礼拝担当者たちによって共同作成された独自の式文が採用されていました。そこには、同じ食卓を囲むことを通じて、回復をもたらそうとされる神様のいつくしみが絶えずあり、友情と和解のしるしへとつながる思いが反映された印象的なものでした。

現行版は 1959年版の改正祈祷書であり、今回の改正版もまた、30年先には次の世代によってさらに新たにされていくことでしょう。信仰の先達が紡いできた祈りを受け継ぎ、他教派や海外とのつながりをさらに深め、それぞれの時代に応じたふさわしい形で信仰を表現することの大切さを学ばせていただきました。

(2025年7月発行「北海の光」792号より転載)



市原 司祭と笹森主教



感謝聖餐式

礼拝研修会 感想

函館聖ヨハネ教会 ミカエル 佐々木茂

79 歳になり、このような研修会に初めて参加させていただきました。
プレセッション(資料展示)において、アイヌ語の聖歌(神ともにいまして)の存在は認識していましたが祈祷書の存在を初めて知り驚きました。

セッション 1(祈祷書改定の理念)では、現代日本における祈祷書改定の理念:他管区の祈祷書改定を参考に「とりわけ英語圏だけではなくアジア特有なもの」という考え方、これは翌日の市原先生の「東アジア共通の交わりの意義」と合わせて強く共鳴致しました。165 ケ国(42 管区)の宣教の営みも視野に「アングリカン・コミュニオン」の伝統に連なること。さらに、「祈祷書改定を行う日本聖公会の理念の共有」として、ミッション・ビジョン・バリューについて大きな学びをさせていただきました。小生が若い時に取り組んだ「大学の自己評価」を思い出しました。

セッション 5:牧会諸式にいて、葬送式や聖婚式などクリスチャンではない方も多く集まる諸式においては「宣教という営み」を意識することが大切であること。また聖婚式における様々な結婚観(同性婚、届け出婚等々)への対応も求められるようになってくるというお話がありました。ジェンダーの課題に対して国の法律との兼ね合い云々ではなく、その時代における「ふさわしさ」を希求していく。人生に起こることを教会がどうとらえるかという避けられない課題であることは承知の上で、どうすることもできない自分がいることに気が付きました。制度的改革の機運を高める行動がカギになるような気がしています。

新しい日本語の開発(翻訳語):「嘆願」→「共同連願」、「懺悔」→「回心」・「共同回心」などの説明をお聞きし、「権利」という訳語を生んだ福沢諭吉や culture を「文化」と訳した(確か西周)を思い出しました。翻訳した時点での意味と現在使われている概念とは必ずしも一致しないのは自明のことですので、「新しい日本単語」が必要です。変わり続けることの大切さ、そのための漢字文化がなせる業なのかもしれません。

以上とりとめのない感想を書き連ねただけですが、今回の研修会で大きな学びが与えられたことに心から感謝しています。残された人生を他者のために生きようという思いが改めて強まりました。

一点だけ、祈祷書改定の理念は十分納得したうえで:「評価」の具体的手順というか方法にひと工夫が必要だと感じました。

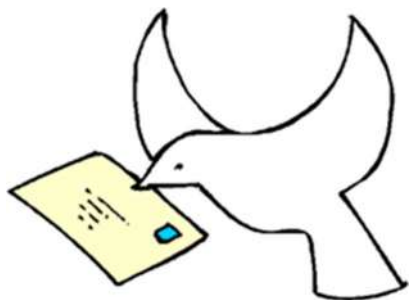


ワークショップ

小生、急な葬儀が入り一足早く函館に戻りました。カトリック教会で 500 人以上の参列がありました。神父さんは白装束で「焼香」という言葉も使われておりました。しかし、神父様の唱える言葉には今一つ物足りなさを感じました。先に触れた「宣教の営み」の重要さを改めて認識する機会となりました。主に感謝。

九州教区から

オンラインで参加された方より、郵便で送られてきた振返りシートに添えられていたお便りをご紹介します。



主の御名を賛美します。

先日は全国の皆様とご一緒に礼拝研修会 2025 にオンラインでの参加でしたが、ありがとうございました。

私はただの一信徒です。信徒奉事者でも、オルガニストでもない、ただの者。セッション1が始まり、祈祷書改正の理念のお話を伺いながら、私がここで聞いていてよいのか、もっと教会関係者(司祭、奉仕者等々、牧師になりたがっている人)

が聞くべきとの思いが強く湧いてきました。

しかしその後、毎日の祈り、そしてセッションが進み、セッション5の牧会諸式のさまざまな式文のお祈りを伺っておりますうちに、LIFE、人生、私のこの与えられた命、今日のこの一日を神に感謝し賛美するのが私たちの務め、と再確認しました。小倉インマヌエル教会牧師小林史明司祭も祈祷書は教会だけでなく、日々の生活、家でも開いて祈りましょう、とおっしゃっておられます。本当に今回参加できましたこと、心より御礼、感謝申し上げます。今日から、この祈り、資料としていただいた式文を使って、まずは私から行動したいと思います。

末筆ながら、これまでのご準備、大変なことだったと存じます。これからもますますのご活躍とご健康をお祈りいたします。

九州教区小倉インマヌエル教会 有村博子



オンライン参加者もいっしょに

札幌キリスト教会は工事中でした



鐘をたずねて

— 稚内聖公会 (伝道所) —



稚内聖公会

「最北端の鐘」

稚内聖公会伝道所 管理牧師 司祭 コルベ 下澤 昌



2025 年 8 月、日本聖公会最北の教会である稚内聖公会 (伝道所) の鐘楼撤去工事が行われ、同時に、吊り下げられていた鐘も外されました。その鐘は、1973 年、当時の定住教役者であった甲斐博邦司祭 (現深川聖三一教会嘱託司祭) が札幌キリスト教会から譲り受け、札幌キリスト教会の信徒であった医師の U さんが約 350 キロの道のりを車で運んでくださり、取り付けられたと言われている。

す。稚内の潮風に耐えるようにとの意図でしょうか、錆がつかないように表面には銀色の塗料が塗られています。

以来、52 年間にわたり、教会のシンボルとしてあり続けました。稚内の教会は定住教役者が与えられた期間はあまり長くありませんでしたが、主日礼拝や朝夕の礼拝の折には鐘が鳴らされ、ここに福音の家があることを人々に告知してきました。

鐘は 30 キロほどの重さがあり、これを吊り下げる鐘楼は時間の経過と共に徐々に前方に傾き、屋根と鐘楼の隙間から雨風が入り、礼拝堂内部にまで傷みが及んでいました。鐘が外されることは断腸の思いでしたが、礼拝堂本体の保全のため、やむを得ない措置でした。

土地の住所は、しばしばその場所の地形や特徴を表しています。潮見 2 丁目という住所がまさにそうです。古くから地元に住む方のお話では、教会から 200 メートルほどの所に海岸があり、教会からも海が見えていたはずでした。まさに潮見です。教会の境内地は砂混じりの土で、前の道路を渡って進むに従って緩い坂を下る地形になっています。このことから、教会が海岸段丘の上にあったことが知られます。海岸は埋め立てられ、海は遠くなりましたが、最初に鐘が鳴らされた時、きっとその音は潮風に乗って海にまで届いていたことでしょう。取り外された鐘は新しい使命が与えられる日まで、静かな眠りに就いています。



鐘楼取り外し前の稚内聖公会



2025 年夏に地上に降りた鐘

祈禱書改正続行中

改正祈禱書 感謝聖餐式(試用版)を用いてみて



札幌聖ミカエル教会では 2025 年 8 月 3 日(日)より、改正祈禱書(試用版)を用いての感謝聖餐式を行なっています。この度の改正祈禱書の大きな特徴として、それぞれの祈りの箇所に複数の選択肢が用意されており、教会ごとにカスタマイズして用いることができます。ミカエル教会では信徒が馴染みやすいように、上平更司祭が現行の祈禱書に近い形になるように選び、作成くださいました。これは、いきなり全て新しいものになると変化について行くことが大変になってしまうので、まずは少しずつ、そして段階的により変化を感じる祈りを選んでいくようにしようという先生のお考えです。

私個人として初日に戸惑ったのが、礼拝中の所作についての指示が少ないところです。現行であった「ひざまずく」がなかったため、私は感謝聖餐祈禱(現行の感謝聖別)以降、座ったままで礼拝を終えてしまいました。現時点では司式者が各教会の信徒の状況に合わせて指示を考え、各々自由な姿勢で礼拝に参加することができるようです。もう一つ感じたことは、言葉がより身近で新しい表現に変えられたことで、今まで以上に親しみやすく、積極的に祈りに参加しているような気持ちになったことです。祈りがより自分たちの言葉として、そこに集められたひとりひとりの体を通して、力強く神様まで届けられたように感じました。

改正祈禱書では、教会暦をより感じられる式文の選択肢が豊富になっていると聞いています。今後も期節に合わせた色々な祈りを用いて礼拝をお捧げできること、また、新しいチャントにどんなメロディーがつけられるのかも今から楽しみです！

(礼拝委員 上平未奈)

礼拝委員増員

北海道教区の礼拝委員会は 2011 年に常置委員会のもとに設置され、松井新世司祭と丸山悦子さんの 2 名でスタートしました。その後、2016 年に鈴木かほるさんが加わり、3 名で活動が続けてきました。研修会等大きな行事の時には協力してくださる方々のお力をお借りして、何とか続けていくことができたことにいつも感謝しています。

今回、笹森主教様からのお声がけもいただき、新たに 3 名の委員が与えられました。三浦千晴司祭、上平未奈さん(聖ミカエル教会)、福島康高さん(札幌キリスト教会)の 3 名です。新たな風が吹き込まれ、これからも教区の礼拝に関する事を、教区の皆様と共に考え、祈っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

奏楽クリニック

毎年札幌キリスト教会で開催されている奏楽クリニックは、講師の菊池泰子先生と、会場の都合により、今年は残念ながら開催することを見送ります。来年はぜひ実施したいと考えています。奏楽に関すること、実技レッスン、お悩み相談、抱えているモヤモヤ、なんでも歓迎です。時期が決まりましたら、お知らせします。楽しみにお待ちください

耳より情報



礼拝委員会では、奏楽者ハンドブックとでもいうべき小冊子の作成を現在進めています。「奏楽者の風箱」には、かつて1号(2009年9月発行)から23号(2017年4月発行)まで、礼拝の奏楽に関する質問、意見、提案など、皆さんからいただいた声にお応えする「情報箱から」というコーナーがありました。これらの記事を元に見直しを行い、新たな情報も加えて奏楽者のためのQA集とでもいうべき冊子を2026年中に発行しようと考えています。

奏楽クリニックの講師でもある菊池泰子さん(東京教区)が、執筆中です。これから奏楽を始める人、長年奏楽をしてこられた方、司式をする聖職、礼拝に出席される会衆のみなさんにもお読みいただき、礼拝で捧げる感謝・賛美の歌声が豊かに響く助けになれば幸いです。

発行時期、価格、入手方法など、詳細が決まりましたら、皆様にお知らせいたします。首を長くしてお待ちください。



編集者より

木村司祭の南アフリカでの礼拝の様子を読んで、かつて私もいろいろな国の礼拝にでて、感動したり、びっくりしたりした経験を思い出しました。私たちは今、日本に住んでいます。今の日本の社会の中で、どのような礼拝を行うことが求められているのか、社会の動きに目を配りつつ、自分の気持ちも大切にしながら、前を向いて歩んでいきたいと礼拝研修会に参加して感じました。皆さんからいただいた振返りシートの中から佐々木茂さんの文章をご紹介しますことができました。九州の有村さんのお便りも、掲載にご快諾いただき、感謝です。

私が住んでいる道南の地から稚内までは600キロ以上。念願かなって8月末に稚内で行われた道北4教会の合同礼拝に出席することができました。思いがけず奏楽もさせていただきました。古今聖歌の290番「北のはてなる」が退堂聖歌に選ばれていて、日本最北端の教会でこの曲を奏楽し、皆さんの力強い声とともに神様を賛美することができたことは、きっと生涯忘れない思い出になるだろうと感じました。

今号の付録のシンプルスコアは374番「心の扉を開くと」と481番「この世の波風さわぎ」です。どちらも著作権が日本聖公会にあり(481番は歌詞のみ)、使用申請許可を頂きました。481番は有名なメロディーですが、♭が5つもついているので、弾くことをあきらめている方もいらっしゃるのではないかと思います、ハ長調に転調してあります。奏楽奉仕の幅が広がることを願っています。

ニュース、質問等、皆さんの声をお待ちしています。

情報箱 投函先

郵便:040-0054 函館市元町3-23 函館聖ヨハネ教会 教区礼拝音楽情報箱

FAX:0138-23-5656 (函館聖ヨハネ教会)

Eメール:e-k-maru@msb.ncv.ne.jp (丸山悦子)